

興味の鼎様相モデルに基づく授業方略が学習意欲の維持に及ぼす影響

藤本美結子*・沖林洋平**

How teaching strategy based on the Three-Element Model of interest influences the maintenance of motivation to learn.

FUJIMOTO Miiko*, OKIBAYASHI Yohei**

(Received September 27, 2024)

In this study, the influence of a lesson based on the Three-Element Model of interest on the maintenance of students' motivation to learn was examined. In addition, the influence of students' recognition of daily relevant values on their understanding of the content after the end of the class was examined. In this study, an experimental structure of an actual university lesson was designed to promote educational effectiveness. The students' recognition of daily relevant values was measured in each lesson. The results showed that the students' perception of daily relevant values after the class improved more than before the class. In addition, it was found that the perception of daily relevant value in the final class positively influenced the students' understanding of the content after the class.

Key Words: Three-Element Model of interest, recognition of daily relevant values, Experimental structure of an actual lesson

はじめに

教員にとっては、子どもたちが興味を持って学習に取り組むことが共通の願いだろう。学習指導要領にも、「児童は学ぶことに興味を向けて取り組んでいく中で、新しい知識や技能を得て、それらの知識や技能を活用して思考することを通して、知識や技能をより確かなものとして習得するとともに、思考力、判断力、表現力等を養い、新たな学びに向かったり、学びを人生や社会に生かそうとしたりする力を高めていくことができる」とある。児童が学習に興味を向けることは、児童がこれからの社会で必要となる資質能力を育む上での前提として扱われるのである。しかし、一言で「興

味」と言っても、想像していくうちに、たくさんの状況が頭に思い浮かぶのではないだろうか。熱しやすく冷めやすいという言葉があるように、一時的に湧いてすぐに消えてしまう興味から趣味のように長年ずっと持ち続けられる興味も考えられる。筆者自身の経験としては、イラストが可愛らしいからという理由で興味を向けて本を買ったのだが、読み進めていくうちに内容がおもしろいからと入り込んでいたということもある。このように興味には種類があるのではないかと考える。子どもたちに最終的に望むのは、後者のような深い興味であろう。本研究では、興味の深さに着目し

*山陽小野田市立高千帆小学校, 〒756-0080 山口県山陽小野田市くし山1丁目25-1

**山口大学教育学部, 〒753-8513 山口市吉田1677-1, yoki@yamaguchi-u.ac.jp

て、興味の進化を促す介入を提案し、その効果について検討していきたいと考える。

興味の深さと興味尺度 興味の源泉が外的要因か学習内容そのものなのかによって、興味は大きく2つに分けられる。先行研究では、浅い興味の段階はポジティブ感情のみが生起している状態であり、深い興味の段階では、学習内容の価値が認知されている、と指摘されている(田中, 2015)。何かに取り組む場合、常に驚きや達成感などのポジティブ感情が得られるわけではなく、難しい問題に直面して諦めたくなることもある。このようなポジティブ感情が高まらない場面においても行動を続けられるのは、価値の認知を伴った興味であると考えられるだろう。そこで田中(2015)は、興味をポジティブ感情によって生起する興味と価値を評価することによって生起する興味とを区別し、それぞれを感情的興味、価値的興味と呼んだ。ポジティブ感情が高まらない場合に、価値の認知が行動の継続を支えることができると考えられるため、価値的な興味の方が感情的興味よりも深い興味であると言える。

興味の理論的想定は Figure1 のようになるとしている(田中,2015)。本研究では、Figure1 にあるうちの「驚き発見型興味」「達成感情興味」「知識獲得型興味」「思考活性型興味」「日常関連型興味」の尺度を使って、学習者の興味尺度を測ることとした。

興味の深さを捉える鼎様相モデル 興味の深さを捉える枠組みとして、「鼎様相モデル」(田中・市川,2017)を用いる(Figure2)。鼎様相モデルでは「時間的持続」「内容本質性」「価値随伴性」という3つに着目している。それぞれの軸の観点から興味の深さを捉えることができる。(田中・市川,2017)に基づいて、それぞれの軸について説明する。まず、「時間的持続」の軸は、先行研究で指摘されてきた状況的興味と個人的興味を区別する観点と同一である。一時的に生起するだけの興味よりも、持続的に抱かれている興味の方がより深い興味であると考えられる。次に、「内容本質性」の軸では、興味を生起させた要因が学習環境によって変化しうるような表面的な特徴である場合に比べ、その課題の本質的特徴である場合に、より深い興味であるといえる。たとえば、テキストにカラフルな写真やイラストを挿入したり、雑談を入れたりするなど、学習内容とは直接関連のない要因に基づいた興味よりも「学習内容が理解できてうれしい」「学習内容の意義を感じられておもしろい」など学習内容に取り組むこと自体に基づいた興味の方が、より深いと考えられる。最後に、「価値随伴性」の軸では、感情にのみうったえる形で喚起される興味に比べ、学習内容に内在する価値の認知を伴った興味の方がより深い興味であるといえる。

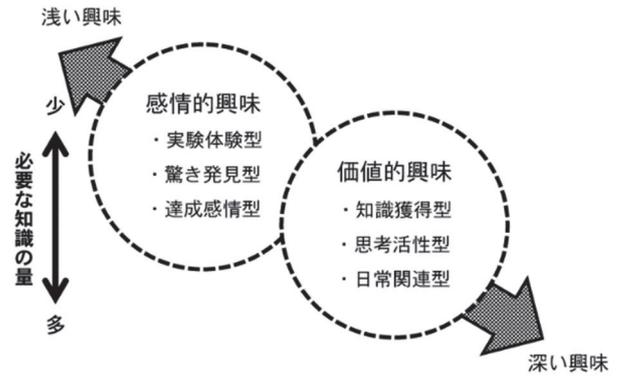


Figure1 興味尺度の構造の理論的想定(田中, 2015 Figure1)

前述のように、先行研究においても、学習内容の価値を認知することが興味の深化にとって重要であると指摘されている。

これら3つの要素はそれぞれ内容的に別の次元を表しているが、相互に高い機能的関連性を有しているとされる。興味深化のプロセスにおいても、それぞれの軸において独立した次元で深まっていくのではなく、3つの軸が相互に影響を与えながら変化していくと考えられる(田中・市川,2017)。

価値の認知を伴った深い興味を育むためには、以下のような枠組みが重要であると考えられる。まず課題を提示する文脈を工夫することで一時的にポジティブ感情を高め、それに加えて具体的な達成目標を提示して課題への関わりを雑持させる。そのような土台を整えて初めて、価値の認知への介入が効果をもつようになるだろう。本研究でも課題を提示する文脈を工夫することで一時的にポジティブ感情を高める操作を“Catch”と呼び、具体的な達成目標を提示して課題への関わりを維持させる操作を“Hold”と呼ぶ(Mitchell,1993)。

日常関連価値の認知を高めるための手立て 本研究では、大学の授業における日常関連価値の認知が学習意欲の維持に及ぼす影響を検討した。大学の授業場面において、日常関連価値の認知を伴う深い興味を育む介入方法について述べる。日常関連価値の認知を高めるために、まず Catch & Hold を行った後、日常関連価値の認知に介入するという興味の深化プロセスを踏まえる必要がある。

本研究では“Catch”として、授業の導入時に、これから学習する内容を理解すれば説明できるようになる学生にとって身近な課題(各授業のはじめに提示するものとする)を提示することとする。なぜなら、身近な課題であれば、発達心理学について苦手意識のある学生に対しても、「今日の授業はおもしろそう」というポ

ジティブ感情を生起させることができると考えられるからである。また、提示する課題は授業内容と密接に関わる内容であり、しかも学習内容の本質から外れた表面的すぎる介入ではないため、発達心理学に対する興味がもともと高い学生にも良い影響をもたらすだろうと予想されるからである。さらに、課題を提示した後、学生に対して積極的な授業参加を促進させるための“Hold”の介入として、これから習う授業内容を理解すれば課題の説明ができるようになることを伝えることによって、達成すべき具体的な目標を提示する。このような導入時の工夫を行うことで初めて、より深い興味の側面である日常関連価値の認知へとつながる。

本研究の授業実践の概要 本研究では、興味の深さを捉える鼎様相モデルに基づいて、興味の深化を促すCatch&Holdや日常的課題解決等の介入を提案し、興味の持続や感情から価値への転移、学習内容の理解との関係について検討することを目的とする。個人のもつ意味理解志向、特殊的好奇心等と感情、価値の認知との関係から、介入の効果の個人差を解消するための提案も行いたいと考える。そのために、授業の導入時にCatch & Holdとして本時の内容と関わる課題を見せ、その課題について説明できるようになることを本時の目標とすることを伝える。その後、日常例を挙げながら授業を行う中で日常関連価値の一般化について強調を行う。

方法

実践時期 2022年10月から2023年1月に授業を行った。

参加者 授業の受講者38名を対象とした。

手続き 本研究の授業における興味喚起は以下の手続きで実施された。6回の発達心理学の授業の中でそれぞれの条件を変えて、授業の効果を比較する。それぞれの回は、「Catch+強調回」、「Catch+強調+日間回」、「Catch & Hold+強調回」、「Catch & Hold+強調+日間回」と命名した。「Catch+強調回」では、導入時にCatchを行い、授業の中で日常例を挙げながら日常関連価値の一般化について強調を行う。「Catch & Hold+強調+日間回」では、導入時にCatch & Hold、授業の中で「Catch+強調回」と同様に強調を行い、日常場面を題材とした問題解決を行った。(Table1)

Table1 各授業回における要因の有無

	Catch	Hold	日常例 +強調	問題解 決
第1回	○	×	○	非日常
第2回	○	×	○	日常
第3回	○	○	○	非日常
第4回	○	○	○	日常
第5回	○	○	○	日常
第6回	○	○	○	日常

各授業回における調査 授業における調査実施は、以下の手続きで実施された。授業開始前に意味理解志向と興味尺度に関する事前質問紙を配り、回答を求めた。授業回ごとに異なる流れや教示で授業を行い(Figure3)、6回分の授業が終了した後、事後質問紙、理解度確認テストなどが行われた。授業における具体的な介入内容については以下の通りである。

導入セッション 導入セッションで扱う課題は、学生にとって身近に起こり得る場面であるが、その回の授業内容を理解し、論理的に考えなければ説明できない内容のものを選択した。(Figure 4) Holdありの授業回では、課題を授業の初めに提示し、今回の授業内容をしっかり理解することで、課題の説明をすることができるようになることを伝えた。

Table2 授業タイプごとの授業構成

	授業タイプ			
機能	Catch + 強調	Catch + 強調 日常	Catch & Hold + 強 調	Catch & Hold + 強 調 + 日 常
調査1	授業前質 問紙	授業前質 問紙	授業前質 問紙	授業前質 問紙
Catch	非日常	日常	非日常	日常
Hold			Hold	Hold
講義	講義セッ ション	講義セッ ション	講義セッ ション	講義セッ ション
課題解 決	非日常課 題	日常的課 題	非日常課 題	日常的課 題
調査2	授業後質 問紙	授業後質 問紙	授業後質 問紙	授業後質 問紙

第1回
場面「2人の子どもが1枚のビスケットを取り合
 ってけんかをしています。」
問い「あなたはどのようにしてその場を収めます
 か。」
第2回
場面「教育実習やボランティアに行くと次のよう
 な子どもがいました。『うちは親ガチャに外れたか
 ら勉強しても仕方ないんだー』」
問い「みなさんならどのようにかわります
 か？」
第3回
場面「年末年始、恋人はUSJに行きたいとい
 うが、わたしは家でぬくぬくしたい。」「恋人は異
 性の仲間がいる食事会などに頻繁に行くのをあま
 りよく思わないけれども、ある程度自由に行動した
 い。」
問い「あなたは以下について、どのように考えま
 すか。」
第4回
場面「A戸棚にあるお菓子を取ろうとして、まち
 がって15個のガラスコップを割ってしまった。B
 お母さんが戸棚に隠しているお菓子を取ろうとし
 て、まちがって1個のガラスコップを割ってしまっ
 た。」
問い「あなたはAとBのどちらが悪いと考えま
 すか。」
第5回
場面「あなたが受け持っている家庭教師先の高校
 1年生Aがこのようなことを言った。『高校に入っ
 て勉強も急に難しくなったし、〇〇っていう仕事に
 はなりたいけど勉強も大変そうだし、中学の時の友
 達とも全然あつてないし、無理して進学校にくるこ
 となかったな。先生、勉強って何のためにするん
 ですか?』」
問い「Aを納得させるためにどのようなことを言
 いますか?」

Figure2 導入セッションの課題場面と問い

調査項目 本研究では、興味を測定するために以下
 の項目を用いた。7件法で評定を求めた。

授業前ポジティブ感情（前感情） 「発達心理学の
 勉強をするのは楽しいと思う」「発達心理学はおもしろ
 いと思う」「発達心理学の勉強をするのはつまらないと
 思う（逆転項目）」の3項目。

授業前日常関連価値の認知（前価値） 「発達心理

学で勉強したことは生活の場面で役にたつから」「発達
 心理学の勉強で得た知識は、いずれ仕事や生活の役に
 立つと思うから」の2項目。

授業後日常関連価値の認知（後価値） 「今日の授
 業で扱った内容は、私たちの身のまわりの現象を理解
 するのに（1.全く役に立たない～7.とても役に立つ）」

「今日の授業で扱った内容は、私たちの生活において
 学ぶ価値のある内容であると（1.全く思わない～7.と
 ても思う）」の2項目。

授業後ポジティブ感情（後感情） 「今日の授業は楽
 しかった」「今日勉強した単元はおもしろい」の2項目。

結果

本研究では、第1回から第5回の授業の調査結果を
 分析した。各因子の授業時期における平均値と標準誤
 差をTable3に示す。各因子の平均値の推移をFigure3
 に示す。Figureのエラーバーは標準誤差である。

Table3 各因子の授業時期における平均値(M)と標
 準誤差(SE)

因子	時期	授業回	M	SE
感情的 価値	授業前	1	5.33	0.14
		2	5.18	0.25
		3	5.26	0.29
		4	5.49	0.22
		5	5.46	0.24
	授業後	1	5.73	0.17
		2	5.69	0.21
		3	6.04	0.3
		4	5.85	0.26
		5	5.92	0.2
日常 関連 価値	授業前	1	5.23	0.2
		2	5.31	0.23
		3	5.46	0.23
		4	5.46	0.32
		5	5.62	0.23
	授業後	1	6.08	0.21
		2	5.96	0.26
		3	5.58	0.23
		4	5.54	0.27
		5	6	0.18

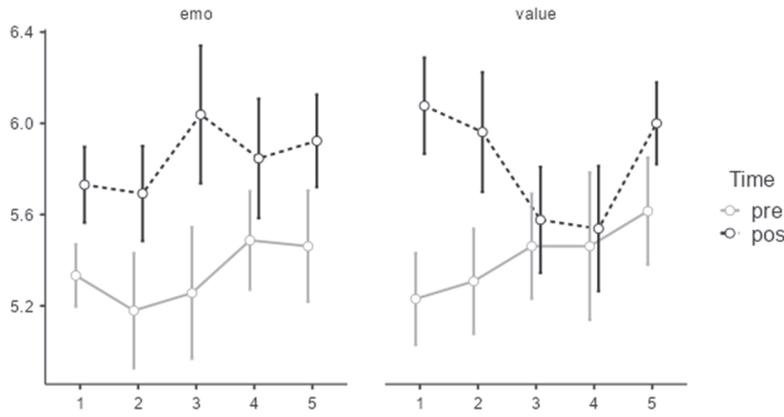


Figure4 各因子の授業回による推移
(エラーバーは標準誤差)

第6回の授業後価値得点で高群と低群に分け、グループ間で講義全体終了後の理解度テスト(12点満点の単語回答課題)の平均値を比較したものが Figure5 である。1 要因分散分析の結果、群間の得点の差は有意傾向であった($F(1,27) = 3.72, p < .1$)。

考察

授業の導入時にポジティブ感情を喚起し積極的授業参加を促す Catch & Hold を行い、日常的課題解決を行う活動を設定することで、ポジティブ感情が高まり、日常関連価値の認知も伴うことが示された。また、ポジティブ感情から日常関連価値の認知への転移も一部見られることが示された。

本研究によって以上の結果が得られた理由を「鼎様相モデル」もとづいて考察する。前述の通り、「価値随伴性」の軸では、感情にのみうったえる形で喚起される興味に比べ、学習内容に内在する価値の認知を伴った興味の方がより深い興味である。しかし、まずは学習者に価値不随的部分から触れさせ、ポジティブ感情を高め、徐々に価値の認知へと転移させていくことが理想であると考え。田中 (2013, 2015)、学習内容の価値を認知することが興味の深化にとって重要であると指摘されているが、全ての学習者を置いていかない

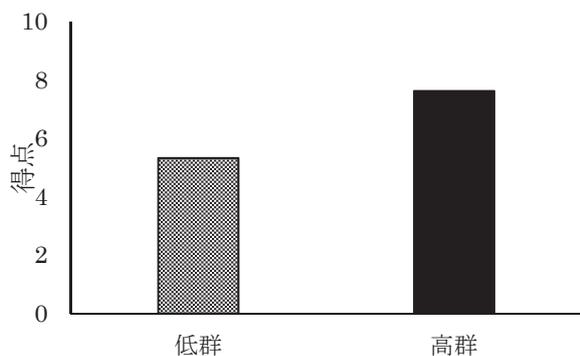


Figure5 第6回目後価値による授業理解度

ためには、誰でも簡単に手に入れることが可能な浅い興味に関してアプローチすることも非常に重要なことであると考え。

また、特殊的好奇心、関連づけ、第6回目の日常関連価値の認知の中の、どれか1つでもあれば、授業の理解度が高くなることが示された。もちろん、特殊的好奇心や関連づけを高めるのも1つの手だが、学生の中でも特殊的好奇心が高い人は上位13%、関連づけが高い人は上位16%しかおらず、極めて少数であるといえる。一方、日常関連価値の認知については、

今回の発達心理学での様々な介入によって、最終的に76%も高い人がいる状態になった。特殊的好奇心というのは、これまでその人が置かれてきた環境によって長い時間をかけて出来上がる個人の特性である。関連づけについても、その人が勉強の方法を知っているかということであるので、経験が関わる。つまり、個人の特殊的好奇心と関連づけ志向を変えるには、長い時間がかかるのである。しかし、日常関連価値の認知は、Catch & Hold や日常的課題解決の時間をしっかり設定すれば、高めることができる。したがって、日常関連価値の認知の獲得が難しい学習者にとっては Catch & Hold や日常的課題解決の時間をしっかり設定するべきであると考え。授業者の介入によって、学習者の価値の認知を最終的に手に入れることができれば、理解度を高めることにつながるので、本研究で行われてきたような介入を行うことは意義があるだろう。

引用文献

- Mitchell, M. (1993). Situational interest: Its multifaceted structure in the secondary school mathematics classroom. *Journal of Educational Psychology*, 85, 424-436
- 沖林洋平(2017). 知的好奇心と授業に対する興味と学習内容の定着の関係, 日本教育工学会論文誌, 41(Suppl.), 133-136.
- 田中瑛津子(2013). 興味の深化を促す授業方略の検討—ポジティブ感情と価値の認知に着目して—, 教授学習心理学研究, 9(1), 12-28.
- 田中瑛津子(2015). 理科に対する興味の分類—意味理解方略と学習行動との関連に着目して—, 教育心理学研究, 63(1), 23-36.
- 田中瑛津子・市川伸一(2017). 学習・教育場面におけ

る興味の深化をどう捉えるか—鼎様相モデルによる諸研究の分析と統合—,心理学評論, 60(3), 203-215.